

はんにやしんぎようひけん

般若心經秘鍵

序を并せたり

へんじようこんごうせん
遍照金剛撰

もんじゆ りけんなしよけ た

文殊の利劍は諸戲を絶つ

かくも ほんもんなじようご し

覺母の梵文は調御の師なり

しんごんのしゆじ す

㊦ (ちくまん) の眞言を種子と爲

しよきよう がんぞう だらに

諸教を含藏せる陀羅尼なり

むへん しょうじいか よ た

無邊の生死何んが能く断つ

ただぜんな しょうしゆい あ

唯禪那と正思惟のみ有つてす

そんじゃ さんま になゆづ

尊者の三摩は仁譲らず

そ いまさんじゆつ あいひ た

我れ今讚述す哀悲を垂れたまへ

そ ぶつほう はるか あら しんじゆう すなわ ちか しんによほか

夫れ佛法は遙に非ず。心中にして即ち近し。眞如外

あら す いづく もと めいごわ あ

に非ず。身を棄てて何んか求めん。迷悟我れに在れば、

ほっしん すなわ いた みようあんた あら しんじゆう

發心すれば即ち到る。明暗他に非ざれば、信修す

たちまち しょう あわれ かな あわれ かな ぢようめん し

れば忽に證す。哀なる哉、哀なる哉、長眠の子。

くるし かな いた かな きようすい にな つうきよう よ
苦い哉、痛い哉、狂酔の人。痛狂は酔わざるを笑

こくすい かくしや あぎけ かつていおうのくすり とぶら
ひ、酷睡は覺者を嘲る。曾醫王之薬を訪はずんば、

いづ とき だいにちのひかり み えいしよう きようじゅうかくご
何れの時にか大日之光を見ん。翳障の軽重覺悟の

ちそく ごと いた きこんふどう しようよくすなわ こと
遅速の若くに至っては、機根不同にして、性欲即ち異

ついでん にきようあと こと て こんれんのじよう わか
なり。遂じて二教轍を殊んじて、手を金蓮之場に分

ごじようくつばみ なら ひづめ げんにようのらち あが そ
ち、五乘 鑿を並べて、蹄を幻影之埒に踰つ。其の

げどく したが くすり う すなわ べつ じぶどうしの
解毒に随つて薬を得ること即ち別なり。慈父導子之

ほうたいこうこ あ
方大綱此れに在り。

だいはんにやはらみ たしんぎよう いっぱ すなわ こ だいはんにやぼさつ
大般若波羅蜜多心經と者、即ち是れ大般若菩薩の

だいしんしんごんさんま じほうもん もんないっし かけ ぎよう すなわ
大心眞言三摩地法門なり。文は一紙に缺て、行は則

じゆうし い べ かん しよう つづまや
ち十四なり。謂ふ可し、簡にして要なり、約かにし

ふか ごぞう ほんにや いっく あく あ しちしゆう ぎよう
て深し。五藏の般若は一句に嘸んで飽かず、七宗の行

か いちごう の た くわんざいさつた すな しよじようの
果は一行に歡んで足らず。觀在薩埵は則ち諸乘之

ぎようにんのあ どくねはんすなわ しよきようのとくらつとかか
行人を擧げ、度苦涅槃は則ち諸教之得樂を褰ぐ。

五蘊は横に迷境を指し、三佛は豎に悟心を示す。色空
と言えば則ち普賢頤を圓融之義に解き、不生と談
ずれば則ち文殊顔を絶戲之觀に破る。之を識界に
説けば簡持手を拍ち、之を境智に泯ずれば歸一心を
快くす。十二因縁は生滅を麟角に指し、四諦法輪
は苦空を羊車に驚かす。況んや復た打（ぎやてい）の
二字は諸藏之行果を呑み、（はらそう）兩言は顯密
之法教を孕めり。一一の聲字は歴劫之談にも盡き
ず、一一名實は塵滴之佛も極めたもうこと無し。是の
故に誦持講供すれば則ち苦を抜き樂を與え、修習思
惟すれば則ち道を得通を起こす。甚深之稱誠に宜し
く然る可し。余童を教うる之次に、聊か綱要を撮つ
て彼の五分を釋す。釋家多しと雖も、未だ此の幽を
釣らず。翻譯の同異、顯密の差別並びに後に釋する

が如し。或が問つて云く、船若は第二未了之教なり、
何ぞ能く三顯之經を呑まん。如來の說法は一字に五
乗之義を含み、一念に三藏之法を説く。何に況んや一
部一品、何ぞ匱しく何ぞ無からん。龜卦爻著萬象を含
んで盡ること無く、帝網聲論諸義を呑んで窮まらず。
難者の曰く、若し然らば前來の法匠何ぞ斯の言を吐
かざる。答う、聖人の藥を投ぐること機の深淺に隨い、
賢者の説黙は時を待ち人を待つ。吾未だ知らず。蓋し言
う可きを言わざるか、言うまじければ言わざるか、言う
まじきを之を言えらん。失智人斷りたまえ而已。
佛説摩訶般若波羅蜜多心經と者、此の題額に就いて
二つの別有り。梵漢別なるが故に、今佛説摩訶般若波
羅蜜多心經と者、胡漢雜え擧げたり。説心經の三字
は漢名なり。餘の九字は胡號なり。若し具なる梵名

ならば、ボダハシヤマカ (ぼだはしやまか)

はらじゃはらみたかりだそたらん)と曰うべし。初の二字は圓はじめにじえん

満まん覺かく者しゃ之名のな、次つぎの二字にじは密みつ藏ぞうを開かん悟ごし甘かん露ろを施ほす之こ

稱しょうなり。次つぎの二字にじは大多だいた勝しょうに就ついて義ぎを立たつ。次つぎの二

字じは定じょう慧えに約やくして名なを樹たつ。次つぎの三みつは所しよ作さい已い辯べんに就

いて號なと爲す。次つぎの二ふたつは處たしよ中ちゆうに據よつて義ぎを表にようす。次つぎの

二ふたつは貫たかん線せん攝しゆう持じとう等を以もつて字なを顯あらわす。若もし總そうの義ぎを以

て説とかば皆みな人にん法ぼう喻ゆを具ぐす。斯これ則すなわち大だい般はん若にや波は羅ら蜜みつ多た菩

薩さつ之名のななり。即すなわち是これ人にんなり。此この菩ぼ薩さつに法ほう曼まん荼だ羅らしん眞

言ごん三さん摩ま地じ門もんを具ぐす。一いち一いちの字じは即すなわち法ほうなり。此この一いち

の名なは皆みな世せ間けんの淺せん名みようを以もつて、法ほつ性しゆうの深じん號ごうを表あらわす。

即すなわち是これ喻ゆなり。此この三さん摩ま地じ門もんは、佛ほと鷲けじゆ峯ぶう山せんに在いまし

て、鷲じゆう子しとう等ための爲これに之とを説こいたまえり。此この經きように數あまたの

翻譯ほんあり。第だい一いちに羅ら什じゆう三さん藏ぞうの譯やく、今いまの所しよ説せつの本もと是こ

なり。次に唐の遍覺三藏の翻には題に佛說摩訶の四字
つぎ とう へんがくさんぞう ほん だい ぶつせつまか しじ
なし。五蘊の下に等の字を加え、遠離の下に一切の字を
な ごうん した とう じ くわ おんり した いっさい じ
除く。陀羅尼の後に功能無し。次に大周の義淨三藏の
のぞ だらに のち くのうな つぎ だいしゅう ぎじょうさんぞう
本には題に摩訶の字を省き、眞言の後に機能を加えた
ほん だい まか じ はぶ しんごん のち くのう くわ
り。又法月及び般若兩三藏の翻には、並びに序分流通
またほうがつおよび ほんにやりようさんぞう ほん なら じよふんるつう
有り。又陀羅尼集經の第三の卷に此の眞言法を説けり。
あ まただらに じつきよう だいさん まき こ しんごんほう と
經の題羅什と同じ。般若心と者、此の菩薩に身心等
きよう だいらじゆう おな ほんにやしん いっぱ こ ぼさつ しんじんとう
の陀羅尼有り。是の經の眞言は即ち大心呪なり。此の
だらにあ こ きよう しんごん なすなわ だいしんしゆ こ
心眞言に依つて般若心の名を得。或が云く、大般若經
しんしんごん よ ほんにやしん な う ある いわ だいほんにやきよう
の心要を略出するが故に心と名づく。是れ別會の説
しんによう りやくしゆつ ゆえ しん な こ べつて せつ
にあらずと云云。所謂龍に蛇の鱗有るが如し。此の
うんぬん いわゆるりゆう じゃ いろくずあ ごと こ
經に總じて五分有り。第一に人法總通分。觀自在と
きよう そう ごぶな だいいち じんぼうそうつうふん かんじざい
うより、度一切苦厄に至るまで是れなり。第二に分別諸
どいっさいくやく いた こ だいに ぶんべつしよ
乗分。色不異空というより、無所得故に至るまで是れ
じようぶん しきふ いくう むしよとつこ いた こ

なり。第三に行人得益分。菩提薩埵というより、三藐
さんぼだい いた こ なり だいし そうき じみようぶん こちはん
三菩提に至るまで是れ也。第四に總歸持明分。故知般
にや しんじつぷ こ いた こ なり だいご ひぞう
若というより、眞實不虛に至るまで是れ也。第五に祕藏
しんごんぶん
眞言分。𑖀𑖩𑖩𑖩 (ぎやていぎやてい) というより 𑖀𑖩𑖩𑖩 (そわ
いた こ なり
か) に至るまで是れ也。

第一の人法總通分に五つ有り。因、行、證、入、時
こ なり かんじざい い のうぎよう にん すなわち こ にんなほん
是れ也。觀自在と言つば能行の人、即ち此の人は本
がく ぼだい いん じんほんにや のうしよかん ほう すなわち こ
覺の菩提を因とす。深般若は能所觀の法、即ち是れ
ぎよう しょうくう すなわ のうしよう ち どく すなわ しょとく
行なり。照空は則ち能證の智、度苦は則ち所得の
か か すなわ にゆうなり か きよう よ にん ち むりよう
果、果は即ち入也。彼の教に依る人の智無量なり。
ち しゃべつ よつ じまたおお さんじよう さんごう ろくじゆう ひやく
智の差別に依て時亦多し。三生、三劫、六十、百、
もうじゆう しゃべつこ じ な じゆ いわ
妄執の差別是れ時と名づく。頌に曰く

觀人智慧を修して 深く五衆の空を照らす

歴劫修念の者 煩を離れて一心に通ず

第二の分別諸乗分に亦五つあり。建、絶、相、二一是れ也。なり

初に建と者、所謂、建立如來の三摩地門是れなり。

色不異空というより亦復如是に至るまで是れ也。建立

如來と者、即ち普賢菩薩の祕號なり。普賢の圓因は

圓融の三法を以て宗と爲。故に以て之に名づく。又

是れ一切如來菩提心行願之身なり。頌に曰く

色空本より不二なり 事理元より來た同なり

無礙に三種を融ず 金水の喩其の宗なり

二つに絶と者、所謂無戲論如來の三摩地門是れ也。是

諸法空相というより不増不減に至るまで是れなり。無

戲論如來と言つば。即ち文殊菩薩の密號なり。文殊の

利劍は能く八不を揮つて彼の妄執之心を絶つ。

是の故に以て名づく。頌に曰く

はつぷ しょげ た もんじゆ こ か にん
八不に諸戲を絶つ 文殊は是れ彼の人なり

どくくうひつきよう り ぎゆうもつと ゆうしん
獨空畢竟の理 義用最も幽真なり

みつ そう いっぱ いわゆるま かばいた らぼうじさとば さんまじもん
三つに相と者、所謂摩訶梅多羅冒地薩怛嚩の三摩地門
こ なり ぜ こくうじゆうむしき む いしきかい いた
是れ也。是故空中無色というより無意識界に至るまで
こ なり だいじさんまい よらく もつ しゆうとし いんが しめ
是れ也。大慈三昧は與樂を以て宗と爲、因果を示して
かい す そうしようべつろん ゆいしききよう しゃ こころただこ あ
誠と爲。相性別論し、唯識境を遮す。心只此れに在
り。頌に曰く
じゆ いわ

に がいづ とき た さんぎ ほっしんのししよう
二我何れの時にか断つ 三祇に法身を證す

あだ こ しきしよう げんによう すなわ みようひん
阿陀は是れ識性なり 幻影は即ち名實なり

よ に いっぱ ゆいうんむ がばつごういんしゆこ なり こ すなわ に
四つに二と者、唯蘊無我拔業因種是れ也。是れ即ち二
じよう さんま じもんなり む むみよう むろうしじん いた
乗の三摩地門也。無無明というより無老死盡に至る

すなわ こ いんねんぶつのざんまい じゆ いわ
まで、即ち是れ因縁佛之三昧なり。頌に曰く

ふうよう いんねんのし りんねいくばく とし さと
風葉に因縁を知る 輪迴幾の年にか覺る

ろはな しゆうじ のぞ ようろく なあいつらな
露花に種子を除く 羊鹿の號相連れり

無苦集滅道、此れ是の一句五字は即ち依聲得道之
三昧なり。頌に曰く

白骨に我何んか
在る 青瘀に人本より無し

吾が師は是れ四念なり
羅漢亦何ぞ虞しまん

五つに一と者、阿哩也。躡路积帝冒地薩怛躡之三摩地門
也。無智というより無所得故に至るまで是れ也。此の得

自性清淨如來は、一道清淨妙蓮不染を以て、衆

生に開示して其の苦厄を抜く。智は能達を擧げ、得は

所證に名づく。既に理智を泯ずれば、強ちに一の名を

以てす。法華涅槃等の攝末歸本の教、唯此の十字に

含めり。諸乗の差別智者之れを察せよ。頌に曰く

蓮を觀じて自淨を知り
菓を見て心徳を覺る

一道に能所を泯ずれば
三車即ち歸黙す

第三の行人得益分に二つ有り。人、法是れ也。初の

人にんに七ななつ有たり。前まえの六むつ後のちのひと一つひとなり。乘じようの差しゃ別べつの隨したがつて薩埵さつたに異い有あるが故ゆえに、又また薩埵さつたに四よつ有あり。愚ぐ、識しき、
金こん、智ち是これ也なり。次つぎに又また法ほうに四よつ有あり。謂いわく因いん、行ぎよう、
證しょう、入にゆう也なり。般はん若にやは即すなわち能のう因いん能のう行ぎよう、無む礙げり離り障しょうは即すなわち入にゆう涅槃ねはん、能のう證しょうの覺かく智ちは即すなわち證しょう果かなり。文もんの如ごとく
思し知ちせよ。頌しゆに曰いく

行人ぎようにんの數かずは是これ七ななつ 重じゆう二にか彼の法ほうなり

圓寂えんじやくと菩提ぼだいと 正しょう依え何なに事ごとか乏とほしからん

第四だいしの總歸そうき持じ明み分ぶんに又また三さんつ有あり。名な、體たい、用ゆうなり。四し

種しゆの呪明しゆみようは名なを擧あげ、眞實しんじつ不ふ虛こは體たいを指さし、能除のうじよ諸しよ苦く

は用ゆうを顯あらわす。名なを擧あぐる中なかに、初はじめの是ぜ大神だいじん呪しゆは聲聞しようもん

の眞言しんごん、二には緣覺えんかくの眞言しんごん、三さんは大乗だいじようの眞言しんごん、四しは祕藏ひぞう

の眞言しんごんなり。若もし通つうの義ぎを以もつてい**わ**ば、一いち一いちの眞言しんごんに皆みな

四名しみようを具ぐす。略りやくして一隅いちぐうを示しめす。圓智えんち之の人にん三即歸一さんじくきいち

せよ。頌に曰く

じゆ いわ

總持に文義有り 忍呪悉く持明なり

そうじ もんぎ あ

にんしゆことごと

じみよう

聲字と人法と 實相とに此の名を具す

しょうじ にんぼう

じつそう

こ な ぐ

第五に祕藏眞言分に五つ有り。初の **𑖀𑖄𑖡𑖅** (ぎやてい) は

だいが

ひぞうしんごんぶん

いつ

あ

はじめ

聲聞の行果を顯し、二の **𑖀𑖄𑖡𑖅** (ぎやてい) は縁覺の行

しょうもん

ぎようか

あらわ

に

𑖀𑖄𑖡𑖅

(ぎやてい)

えんかく

ぎよう

果を擧げ、三の **𑖀𑖄𑖡𑖅** (はらぎやてい) は諸大乘最勝の

か あ

さん

𑖀𑖄𑖡𑖅

(はらぎやてい)

しよだいじようさいしよう

行果を指し。四の **𑖀𑖄𑖡𑖅** (はらそうぎやてい) は眞言曼荼

ぎようか

さ

し

𑖀𑖄𑖡𑖅

しんごんまんだ

羅具足輪圓の行果を明し、五の **𑖀𑖄𑖡𑖅** (ぼじそわか)

らぐそくりんねん

ぎようか

あか

ご

𑖀𑖄𑖡𑖅

(ぼじそわか)

は上の諸乗究竟菩提證入の義を説く。句義是の如

かみ

しよじようくきようぼだいしようにゆう

ぎ と

くぎかく

ごと

し。若し字相義等に約して之を釋せば、無量の人法等

も

じそうぎとう

やく

これ

しゃく

むりよう

にんぼうとう

の義有り。劫を歴ても盡し難し。若し要聞の者は法に依

ぎ あ

こう

へ

つく

がた

も

ようもん

もの

ほう

よ

つて更に問え。頌に曰く

さら

と

じゆ

いわ

眞言は不思議なり 觀誦すれば無明を除く

しんごん なふしぎ

かんじゆ

むみよう

のぞ

一字に千理を含み 即身に法如を證す

いちじ

せんり

ふく

そくしん

ほうによ

しよう

行行として圓寂に至り 去去として原初に入る
ぎようぎよう えんじやく いた きよきよ げんしよ い
さんがい かくしや ごと いっしんなこ ほんこ
三界は客舎の如し 一心は是れ本居なり

問う、陀羅尼は是れ如來の祕密語なり。所以に古の三
と だらに こ によらい ひみつご このゆえ いにしえ さん
ぞう もろもろ しよけ みなくち と ふで た いまこ しゃく つく
藏、諸の疏家、皆口を閉じ筆を絶つ。今此の釋を作
る、深く聖旨に背けり。如來の説法に二種有り。一つ
ふか しょうし そむ によらい せっぽう にしゅあ ひと
には顯、二つには祕、顯機の爲には多名句を説き、祕

根の爲には總持の字を説く。是の故に如來自ら 孔(あ)
こん ため そうじ じ と こ ゆえ によらいみずか
字(さ)字等(おん)字等の種種の義を説いたまえり。是れ則ち

祕機の爲に此の説を作す。龍猛、無畏、廣智等も亦其
ひき ため こ せつとな りゆうみよう むい こうちとう またそ
の義を説いたまう。能不之間 教機に在りまくのみ。
ぎ と のうふの あいだきようき あ
これ と これ もく なら ぶつち かな
之を説き之を黙する、並びに佛意に契えり。

問う顯密二教其の旨天に懸なり。

今此の顯經の中に祕義を説く不可なり。醫王之目には
いまこ けんきよう なか ひぎ と ふか いおうのめ
途に觸れて皆藥なり。解寶之人は礦石を寶と見る。
みち ふ みなくすり げほうの にんな こうしゃく たから み

し 知ると知らざると何誰が罪過ぞ。又此の尊の眞言、儀軌、

かんぼう ほとけこんごうちょう なか と 観法は佛金剛頂の中に説いたまえり。此れ祕が中の

ごくひ おうけ しゃか きつこおん いま 極祕なり。應化の釋迦は給孤園に在して、菩薩天人の爲

えぞうだんぼうしんごんしゅいんとう と またこ ひみつ に畫像壇法眞言手印等を説いたまう。亦是れ祕密なり。

だらにじつきよう だいさん まきこ けんみつ にん あ 陀羅尼集經の第三の卷是れなり。顯密は人に在り、聲

じ すなわ ひ しか なおけん なか ひ ひ なか 字は即ち非なり。然れども猶顯が中の祕、祕が中の極

ひ せんじんじゅうじゅう 祕なり。淺深重 重まくのみ。

わ ひみつしんごん ぎ よ 我れ祕密眞言の義に依つて

りやく しんぎようごぶん もんのさん 略して心經五分の文を讚ず

いちじいちもんぼうかい へん 一字一文法界に遍じ

むしゅうむ し わ しんぶん 無終無始にして我が心分なり

えげん しゅじよう めし み 翳眼の衆生は盲いて見ず

まんじゅはんにや よ ふんのと 曼儒般若は能く紛を解く

こ かんろ そそ めいしゃ うるお 斯の甘露を灑いで迷者を霑す

おな　　むみょう　　だん　　まぐんのは
同じく無明を断じて魔軍を破せん
はんによしんぎようひけん
般若心經秘鍵

とき　こうにんくねんはるてんかたいえき　　ここ　　ていおうみずか　　おうごんのひつ
時に弘仁九年春天下大疫す。爰に帝皇自ら黄金を筆
たん　　そ　　こんし　　そしよう　　にぎ　　はんによしんぎよういちかんのしよしや
端に染め、紺紙を爪掌に握って般若心經一卷を書寫
たてまつ　　よこうどくのせん　　のつと　　きようしのむね　　つづ
し奉りたまう。予講讀之撰に範って經旨之宗を綴
いま　　けちがん　　ことば　　は　　そしよう　　やからみち　　たたず
る。未だ結願の詞を吐かざるに蘇生の族途に宁む。
よへん　　にっこうかくかく　　こ　　ぐしん　　かいとく　　あら　　きんりん
夜變じて日光赫赫たり。是れ愚身が戒徳に非ず、金輪
ぎよしんりき　　しよいなり　　ただ　　じんじゃ　　けい　　やから　　こ　　ひけんのじゆ
御信力の所爲也。但し神舎に詣せん輩、此の秘鍵を誦
たてまつ　　むかしよじゆふうせつほうのむしろ　　はんべ　　まのあた
じ奉るべし。昔予鷲峯說法之筵に陪って、親子
こ　　じんもんのき　　あにそ　　ぎ　　たつ　　まくのみ
是の深文を聞き、豈其の義に達せざらんや而已。

にっとうしゃもんそれがしじようひよう
入唐沙門空海上表

即身仏佛海上人安置　　大悲山觀音寺　　謹んで写す。